説教20221204イザヤ40：1-11マルコ1：1-8「道はどこにある」

「道はどこにある」今日の聖書箇所では道のことについて語られていますので、この様な題にしてみました。「道は何処に在る」この題は今の世相を反映している様です。

僕の前に道はない　僕の後ろに道はできる、と高村光太郎という彫刻家は歌いましたがそれは明治時代の1910年ころのことでした。それに比べて現代の世相はどうでしょうか。僕の前に道はない、どうしよう、と言って頭を抱えてうずくまっている人が沢山おられる世の中なのではないでしょうか。

それでは聖書は道についてどう語っているかと言いますと、「あなたの道を準備させよう。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』と叫ぶ声が常に聞こえる、と聖書は言っています。主の道というのはイエスキリストが歩んだ道のことです。そして、その道をまっすぐに整備するのが私達人間の務めなのです。つまり、私達人間の前にはいつの時代にもイエスキリストの道があるのです。そしてその道をまっすぐにするというのは、一人でも多くの人にその道を歩ませ、その道を広めていくということでしょう。

とにかく、私達の前にはイエスキリストの道が、最後の最後まではっきりと続いていますので、私達はその道を安心して行くことが出来るのです。

主イエスは、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」と言われました。この様に主イエス御自身が「私は道である」と言われていますので、私達はこの主イエスの声を聞いて、今日も明日も又、イエスキリストの道を新たに歩み出すのであります。その歩みは、最後の最後の新しいエルサレムにまで続く、まっすぐな、行き詰ることがない道のりです。

主イエスが、私は道であると言われたのは、比喩的な表現でもあります。この地上に張り巡らされている無数の道、その一本一本を思い起こして、主イエスはこの様に言われたのかも知れません。今、あなたの眼前に続く道は、毎日目にしている、どこにでもあるような舗装された街角の一画なのかもしれません。しかし、イエス様はその平凡な道も、永遠に続くイエスキリストの道として備えて下さっています。イエス様を信仰するということは、取るに足りないと思われるような平凡な日常の中に、ワクワクするような驚きを見出すことです。

又、今、非常な苦しみと悲しみの内に生活しておられる方にとっては、もう心が持ちません、私の道は閉ざされましたという様に、絶望感に打ちひしがれておられるかも知れません。しかし、そんなときもイエス様を信仰すれば、あなたの目の前に、正しい道が続いており、たとえそれが死の陰の谷を行くような道であっても、イエス様が共に歩んで下さいますので、命は保証され、何ら心配する必要はないのです。

そして、主イエスが、私は道である、と言われたのは、歴史的な出来事を踏まえてのことだったのかも知れません。今日のマルコ福音書の箇所で、主イエスはイザヤ書の箇所を引用して語っています。このイザヤ書が語っている出来事は、イエス様がお生まれになった時代から５００年ほど前の、紀元前５２０年ころの出来事です。その５００前にも『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』と荒れ野で叫ぶ預言者が登場し、そして、時代は繰り返し、イエス様がお生まれになったこの時代にも又、洗礼者ヨハネが登場して同じように『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』と荒れ野で叫んだのであります。このイザヤ書に記されました紀元前520年ごろの時代背景は、いわゆるバビロン捕囚の頃であります。「苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた」とそこに記されていますのは、ユダヤ人たちがエルサレムからバビロンの地へと囚われの身となって捕囚されてから、かれこれ５０年になるので、今や、主なる神は我々の罪を赦して下さり、いよいよ、エルサレムの町へ帰ることが出来るという希望が語られているのです。

バビロンからエルサエムの道、これは、この地上の具体的な道のりであり、それは直線距離にして900キロ、実際の行程として1600キロということです。しかしバビロンとエルサレムとを隔てる物は、この様な地理的な隔てばかりではありませんでした。両者の間には、心理的な隔たりもありました。何しろ、この頃のエルサレムの町の姿は、神殿も跡形もなく消え去り、住民も飲まず食わずの窮乏生活を強いられていましたので、バビロンに捕囚されていたユダヤ人たちが、たとえ荒れ野で叫ぶ預言者の声を聞いたとしても、そうやすやすとは、エルサレムへの移住を決断するわけには行かなかったでしょう。と言いますのは、50年の間バビロンで生活するうちに、ユダヤ人たちは当地で、それなりの安定した生活基盤を築いていた人たちも多かったからです。

それでも、なお、そのユダヤ人たちに、主なる神の口が呼びかけます。

主のために、荒れ野に道を備え　わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。

この主の御言葉は、将に、バビロンからエルサレムに至る道が、イエスキリストの道であることを言い表しています。このようにバビロン捕囚にあった、ユダヤ人たちが、神の都、エルサレムに帰るのは、人間の希望というよりは、神の御心であり、神の計画であったのです。

果たしてエルサレムの町というのはそんなに良いところなのでしょうか。少なくとも此の紀元前520年当時のエルサレムの町は、先ほど申し上げました通り廃墟といってよいほどの状態でしたので、そのままでは、このエルサレムの町に何の希望も見出せないのです。ですから、主なる神が叫んで、人々をエルサレムに呼び戻したということは、今後、此のエルサレムが再建され回復するという希望に歩めということも、当然意味したのでありましょう。

そもそも、エルサレムに帰るということはユダヤ人にとって大いなる喜びでした。御存じの通り、イエス様もエルサレムに上られましたし、人々は、３つの大きな祭りのたびにエルサレムに上ることを習慣としていました。すなわち、神の都エルサレムに巡礼したということです。いわゆる聖地巡礼であります。聖地巡礼というのは、その目的地もさることながら、そこへたどり着くまでの道々も楽しむということは、皆さんよくご存じのことと思います。クリスチャンにとりましても、今のエルサレムというのは、聖地とまでもはいかないまでも、イエス様ゆかりの名所旧跡が数多くある処であり、そこへ行ってみたい、という思いも、善いことではないでしょうか。

しかし、ユダヤ人たちが、エルサレムに巡礼したいという憧れの思いは、クリスチャンの比ではありません。その心情が、「都にる歌」として詩編120～134編に詠われています。どれも巡礼の風景が眼前に思い浮かべられるような歌ですが、中でも122編は印象的です。

主の家に行こう、と人々が言ったとき／わたしはうれしかった。

エルサレムよ、あなたの城門の中に／わたしたちの足は立っている。

エルサレム、都として建てられた町。そこに、すべては結び合い・・・

エルサレムの平和を求めよう。「あなたを愛する人々に平安があるように。

あなたの城壁のうちに平和があるように。あなたの城郭のうちに平安があるように。」

わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。「あなたのうちに平和があるように。」

わたしは願おう／わたしたちの神、主の家のために。「あなたに幸いがあるように。」

ここには、人々が声を掛け合ってエルサレム巡礼へと赴く喜びが、純朴に語られています。私は、ただ、嬉しかったのです。主の道を歩むことがただ嬉しかったので、声掛けあって、その巡礼の旅に踏み出したのです。私はこういうところに、主イエスの道を述べ伝えることの素直な喜びがあると思います。イエス様は、罪を隠さず告白する人を栄えさせ、その人を憐れまれて、イエスキリストの道へと導かれます。イエスキリストの道を共に歩むということは、各々が、それぞれの罪をイエス様に許してもらって、それから洗礼を受けて、聖霊に満たされて、新しいエルサレムへと続く道に導かれ、その道を共に歩んで行くということです。

イエス様がこの地上に来られてから、エルサレムは、この地上に縛られた一つの町ではなくなりました。よく言われます様に、エルサレムの隅の石が、全世界に飛び散って、その石の上に教会が立てられたのです。新しいエルサレムへと続く、イエスキリストの道、それは、十字架の先に続く、けるような、私たち人間にとってみれば幻のような道に思われるかも知れません。しかし、主イエスは、その道を歴史的な道として、私たち人間に、永遠の祝福がある新しいエルサレムに至る道として備えて下さったのでした。

さて、イエス様がお生まれになってから２０００年ほどのときが流れました。バビロン捕囚のときからは２５００年ほどのときが流れました。

現代の世の中を見ますと、何か先行きが見通せず、道が閉ざされ不安だなあと恐れをなしておられる方も居られるかも知れません。しかし歴史的に見ればイエスキリストの道は着々と整備されていると言ってよいでしょう。

私達一人一人は、イザヤ書に書いてある通り、この地上にあって、草は枯れ花はしぼむような、はかない草花の様であります。しかし、この地上に生かされている私達の命は、イエスキリストから頂くパンと葡萄酒によって必要な間保たれて、その間に、私達は、自分自身もイエスキリストの道を確かに歩む者とされ、又、隣り人や、後に続く人達に呼ばわって、その道へと招き入れる役目を担っています。詩編126編の都にる歌は歌います。

涙と共に種を蒔く人は／喜びの歌と共に刈り入れる。

種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は／束ねた穂を背負い／喜びの歌をうたいながら帰ってくる。

確かに、私達は廃墟となってしまったエルサレムの街を見て、茫然として、落胆してしまう者たちであります。しかし、そんな辛い時でも、ただイエスキリストの道を歩んで行けば、私達は、イエスキリストの良き知らせを、次の世代へと伝えていくという役目を果たすことが出来るでしょう。そして、その役目というのは、この世にあって草花の様である私たちに、主イエスが任された、かけがえのない役目であるということを確認して、今日の巡礼の話を終わりたいと思います。

祈ります

父なる

主よ、私達が新しいエルサレムへと向かっているこのキリストの道を守り、豊かに祝して下さい。キリストの道は長い歴史の道であり、又、私たち一人ひとりの前に続く、日々の生活の道でもあります。どうかそのキリストの道を歩む私たちが、死の陰の谷間に差し掛かった時に、恐れ、泣き叫ぶ私たちを、あなたが救ってくださいます様に。

キリストの道が、失われることはありません。いつも私たちの前にはその道が備えられています。どうか私たちが、「主の家に行こう」と喜びながら声かけあうことが出来ますように。今の様に、折が悪いと思われるような時にあっても、次の世代の人たちが、キリストに歩む喜びを味わうことができるよう、ただ、素直に、キリストの福音を語り伝えていくことが出来ますように。

キリストは、永遠の命の糧として、御自分の血と体を、私達に分け与え、永遠の命の道を歩む私たちを養い育てて下さいます。その命の糧を受けることが出来ますよう私たちの心と体を清めて下さい。

父と聖霊と共に一体